

迎賓館便り第2号 ～正門の歴史～



迎賓館だより第2号では、前庭公開にちなんで、正門についての、最近の調査結果をお伝えいたします。

平成26年迎賓館赤坂離宮前庭公開は、11月8日(土)～10日(月)の3日間を予定しています。

館内をご覧いただくことはできませんが、国宝に指定された迎賓館赤坂離宮本館を間近でご覧いただくことができます。

迎賓館赤坂離宮参観とは異なり、事前の申し込みは不要で年齢制限もありませんので、お気軽にご来館ください。開催時間等詳細につきましては、内閣府HPをご確認ください。



迎賓館開館40周年記念行事

平成26年迎賓館赤坂離宮「前庭公開」では、開館40周年記念行事として、世界各国から国賓・公賓などで来日する国王、大統領、首相などをお迎えする際に使用する「正門」を期間中の3日間に限り特別開門いたします。この機会に是非お立ち寄りください。



ライバル社のせめぎ合い

シュワルツ・ミュラー社のデザインに決定される前に、実は、ライバル会社も正門のデザインを提案していたことがわかりました。

同じくパリにあったバルダン (L.Bardin) 社で、複数のデザインを提案していたことがわかりました。

バルダン社の案は採用されませんでしたでしたが、日本の技師が改善点を示している図面もありました。パリの有名会社2社にデザインを提出させ、日本側で選んだものと考えられます。

バルダン社によるデザイン画
(宮内庁宮内公文書館所蔵)



日本製だった両側鉄柵

さらに、資料から両脇の鉄柵は日本で製作されたものであることもわかりました。東京堅鉄製作所(代表・植田六郎平)が、その製作と取付を請け負っています。大正3年に完成した東京駅のアカンサス模様の装飾鉄柱も同じ会社が製作しており、現在も山手線・京浜東北線のホームで一部を見ることができます。



鉄柵部分



JR東京駅山手線・京浜東北線の有楽町よりで見られます。



黒い門から、白い門へ

創建当初から迎賓館に改修されるまで、正門・鉄柵は、黒と金で彩られていました。

迎賓館への改修に携わった建築家の村野藤吾は、「赤坂離宮が迎賓館にイメージチェンジする最大のかつもつとも困難な仕事は、鉄柵の黒と金を白と金に変えることであると思った」と述べています。

さらには、「鉄柵を建物の灰白色や、古くからの人造石やコンクリートに調和させて沈んだ白い色にしたことで、白いベールに包まれて、松の緑も建物も柔かく落ち着きを見せるようになった。一般の人たちにも、自分たちの迎賓館のようにみえて、近づきやすさを感じるようになったと思う」としています。

新たな正門門衛所も親しみやすさを考えて設計され、哨舎はひとまわり小さく設計されました。



正門門衛所と哨舎。オリジナルの哨舎は博物館明治村に保存されています。



歴史を見守ってきた迎賓館正門

一般的に内部まで入る機会の少ない迎賓館では、正門や鉄柵は最も人々に親しまれている部分と言えるかもしれません。東宮御所建設当時の技師たちが、パリの有名な会社と堂々と渡り合ってデザインを決定し、可能な部分を製作した正門・鉄柵が、昭和の改修を経て、より親しみやすくなって、今日までその姿を保っていることに、改めて歴史の流れを感じていただけるのではないのでしょうか。

